



母はエイズで死んだ——リラちゃん(生後40日)の泣き声がりハビリセンターに響く——カトマンズで

記者は見た 過酷な現実

死亡率は20倍

日本に比べ 5歳未満の子

蓮見新也記者 懸尾公治記者



「阪神大震災でアジア・アフリカからも援助の手が寄せられた「お返し」を考えたい」。毎日新聞社と毎日新聞社会事業団の「飢餓・貧困・難民救援キャンペーン」は今年、アジアで最も貧しいネパールの被災地をめぐり、子どもたちの命を救おうと、A.M.D.A.などが現地子ども病院建設計画を進めていた。この運動に協力し、5歳未満児の死亡率が日本の20倍以上という悲惨さを少しでも改善したい。約1ヶ月、私(社会部・蓮見新也記者)は写真部の懸尾公治記者と各地を歩き、子どもたちが置かれた過酷な状況をつぶさに見、その意義の大きさを確信した。国内唯一の元売春婦を対象にしたリハビリセンターで、生後40日の女児、リラちゃんがか細い泣き声をあげていた。母はインドの売春宿から戻ってリラちゃんを産み、5日後にエイズによる感染症で死んだ。この子も感染しているかもしれないが、医者が寄りつかない。女性寮長が嘆いた。まずしさのため、毎年5000人も少女がインドに売られていく。エイズ感染が分かった時か、運良く逃げ出して戻ってきたセンターの少女らと子どもたちは、心と体に深い傷を負っていた。ネパール唯一の輸出産業といわれるカーペット産業。国際的な非難で児童労働は減つ

ネパールに子ども病院を建設しよう

継続的援助、訴え続けたい

「だが、今も数万人がいるとされる。狭い、糸ほこりが舞う劣悪な環境。父の前借りを返すため働いているというブテイー君(14)は「病気になる」とら寝るしかない」と悲しうにつぶやいた。国民の9割が自給自足の農業で、食べるのに精いっぱい生活だ。子どもがインドや

90人が参加

特派員報告会に

ネパールを現地取材した記者の「特派員報告会」が9月26日夜、毎日新聞社で行われ、会社帰りの市民ら約90人が熱心に耳を傾けた。

報告したのは蓮見記者と懸尾記者。スライドをつかって、子どもが出稼ぎや売買の商品として扱われている実態などを、わかりやすく2時間にお



たって説明した——写真真。参加者の中には毎日新聞紙

カトマンズに出稼ぎに出るのはごく普通。幼い子どもが労働力、「商品」として扱われ、命と健康を脅かされている社会構造に怒りさえ感じた。辛い、貧しい患者を無料で治療しようという子ども病院

は、読者からの例年にない善意で建設に向け動き出している。しかし、教育、職業訓練、環境衛生の改善、所得を向上させる社会開発……。多分野での援助が必要だ。そして、官民ともにネパールに関わりが深

面の連載記事や特集記事のスクラップを持参してきた人も見られ、「救済金は現地できちんと活用されているのだからか」「読者やみなさんの善

意をおおき、目に見える形で救済するためネパールに子ども病院を建設することにした」など質疑応答も活発に交わされた。

報道写真展にシヨック

ネパールの子どもや女性、プータンの難民の姿などをまなましく伝える「報道写真展」は10月3日から京都市下

京区四条寺町の「藤井大丸美術サロン」を会場で開催した

の皮切りに神戸、大阪の2会場で開催。写真は今夏、ネパール南東部などで撮影したもので、エイズで母親をなくし、カトマンズのリハビリセンターで生活する

生後40日のリラちゃんなど貧困の中で生きるネパールの子どもや女性、難民の悲痛な表情が伝わって来る50点の写真。入場者たちは「知らなかった」「想像以上の悲惨さだ」などシヨックを受けていた。

11月6日、10日は神戸市東灘区のコープこうべシアターで、12月16日、21日は大阪市中央区大手前1、ドーンセンター(府立女性総合センター)1階バブオーマンズスペースで開催。